

《論文》

被災地域社会が持続する可能性

——岩手県大槌町吉里吉里地区のケースから

麦倉 哲¹

要旨：

東日本大震災において甚大な被害を受けた自治体は、自治体が存続する危機に直面するという予測がなされてきた。しかしながら、本論が対象とする岩手県大槌町吉里吉里地区では、地域社会の持続性が保たれている。「地域の力」が持続し、その力が発揮され続けている。住民はもとより住民以外の人々をも引き付ける磁場が形成され、それを持続させるような文化が構築されつつある。地域で発揮される「地域共同体」を基調とした力を、ここでは三つの次元に整理した。第Ⅰは、「共同体としての緊急事態への対応力」、第Ⅱは「日常生活における共同的対処」、そして第Ⅲは「非日常生活における共同的対処」である。この地区の人口が、他の甚大な被災エリアと比べて減少幅が小さく、復興の度合いについての自己評価も相対的に高いのは、こうした地域共同体的な総合力の発現と不可分ではないのである。

キーワード：住宅再建、津波被害、復興まちづくり、人口維持、地域共同体

はじめに

復興した街並みと太平洋とを2方向に見下ろす高台に、大槌町吉里吉里地区の「東日本大震災」記念碑は建立された。その碑には「忘れない あの日 あの時を」と題する新たな決意が刻まれた。「平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震と津波により吉里吉里地域では100名もの尊い命が犠牲となり、被害棟数は424棟にも上りました。当地域はこれまで、幾度も津波を経験しました。今回の忌まわしい大災害に遭遇して、私たちは『いち早く逃げる』『高い所に避難する』『自分の命を守る』という教訓を肝に銘じて、あの悲惨な経験を二度と繰り返さないために『忘れないあの日、あの時

を』刻みます」と¹⁾。

石造のモニュメントは平板で、少し大きめの丸い穴が空けてある。陸側から見たその穴の先からは、太平洋から上がった太陽の朝日が降り注ぐ。山野と海の恵みで暮らし、海を忘れず復興した街を照らす意味合いが込められている。

1 主題

東日本大震災で大規模な被害を受けた自治体は人口減少に歯止めがかからず、存続の危機に直面するという予測がなされてきた。岩手県内最大の犠牲比率（2010年国勢調査比で-8.4%）となった大槌町は、数々の復興事業が実施された後も人口減少が続く。しかしながら、町内を詳しくみて

¹ 岩手大学

いくと、人口減少の傾向は一様でないことがわかる。本論で注目する吉里吉里地区では、地域社会の持続性が保たれている面が多々うかがわれるのである。

「地域の力」を持続し発揮させる活動が展開され、住民はもとより住民以外の人々を引き付ける磁場が形成され、それを持続させるような文化が構築されつつある。次世代へと架橋する実践が重ねられれば、人口減少には歯止めがかかるかもしれないし、人口が減少しても地域社会は持続可能であるかもしれない。地域の力がレジリエントな（復興・回復的な）状況になりうる可能性を、吉里吉里地区には見いだせる。一部の産業の数値は減少し変容を伴いつつも、また一定の人口減少を伴いつつも、地域の力を維持し発揮させ続けられれば、地域社会は新たな展開を迎えるのではないか。大災害という起きた事実と向き合いつつも、将来に備えるような持続的な姿が見いだされるのではないだろうか。

2 対象と方法

人口統計の推移から過疎化の深刻度を予測する研究方法がある。本論の研究方法は、こうした研究方法とはまったく異なる方法で、地域社会の将来を予測するものである。

これまでに筆者らが吉里吉里地区住民の協力により取り組んできたこの地区の被災から12年間の取り組みの事例や個人々のケースを分析し、この地区の特性と地域社会が持続する可能性を明らかにするものである。

対象となる大槌町および吉里吉里地区に関する既存の各種資料を分析しつつ、筆者がこれまでに同町で実施した調査データを分析する。この中には、参与・関与観察調査のデータや、数量データや地図データも含まれる。2021年に地区住民を対象に「吉里吉里10年」を主題とした質問紙調査（以下「吉里吉里10年目住民調査」）の結果も併せて分析する。さらに、2022年に着手した住宅再建に関する吉里吉里地区全数調査も加えて総合的に検討したい。

筆者は東日本大震災発災後から12年間にわたり、当該地域住民を対象とした調査を重ねてきたが、地域住民を対象とするというよりも、自分自身がこの地域の人々の被災の深刻さを知り、地域防災の緊急対応の質の高さを知り、この地域社会に根付いたさまざまな共同体活動を知り、犠牲死者遺族から話をうかがい記録化し、一人ひとり、世帯ごとの復興状況を知り、この地域社会の自主防災計画を作成する協働の作業に参画するという立場に身を置いたのである。

2018年4月22日には、地域の復興の拠点として吉里吉里分館が完成した²⁾。こうした行事を地区



写真1 大槌町吉里吉里地区震災記念碑

が主催して実施したのである。大槌町の一部の地区というよりも、もともとは吉里吉里村として独立していた時代のガバナンス力を今も発揮している。筆者はその地元主催の落成式に参加させていただいた。ある地区のリーダーから、「あなたはもうよそ者とはいえない」と言われたことをうれしく思い、この町との縁を改めて育んできた。

3 大槌町吉里吉里地区の被災状況

大槌町では、海岸に面したほぼすべてのエリアで甚大な被害を受けた。吉里吉里地区の被災状況も甚大で、このことは津波の遡上高からわかる。表1は、東日本大震災に襲われた大槌町各地区の津波の状況を示している。これを見ると、吉里吉里の津波遡上高は16.1mで、また吉里吉里漁港では22.2mとなっている。船越湾に面する吉里吉里地区の津波遡上高は、大槌湾の町方主要部の遡上高よりも高かったということである。

次に表2は、大槌町の地区ごとの建物の被災状況を示している。被災棟数で吉里吉里地区は、町

方地区、安渡地区、桜木町・花輪田地区に次いで467棟と多く、全壊の戸数は395戸で町方地区と安渡地区に次いで多い。

表3は、2014年当時の行方不明者数がまだ確定していない段階での資料である。地区別の死亡者・行方不明者の状況を示している。吉里吉里地区の津波の高さはほかと比べても高かった。被災死亡比率は約4%である。住民の避難意識は高く、その行動をもってしても100人が犠牲となったといえる。死亡者数で比べると、町方地区、安渡地区に、沢山・源水・大ケ口地区に次いで多い97名であるが、死亡率で比較すると、小枕・伸松地区、赤浜地区、浪板地区、小鎚地区よりも低く7番目となる。このことから吉里吉里地区は、遡上高の高い津波に襲われたものの、地区住民の避難行動によりある程度は、命を守る行動ができたとみられる。

次に被災後の人口の状況について、大槌町の人口は3割ほど減少している。被災の犠牲によるものに加えて、自然減、社会減が重なった状況である。地区ごとにみていくと、表4に示したように、大槌町全体では11年前との人口比が68.9%であるのに対して、吉里吉里地区は70.6%と少々高い。吉里吉里地区と同様に沿岸の被災地域でコ

表1 東日本大震災津波の概要

発生日時	2011年3月11日(金)14時46分頃
震源地名	三陸沖：北緯38°6.2′、東経142°51.6′
震源の深さ	24km
規模	モーメントマグニチュード9.0
周辺の震度	震度6弱(釜石市)
来襲津波への対応	3月11日14時49分：大津波警報発表 3月12日20時20分：津波警報に切替 3月13日07時30分：津波注意報に切替 3月11日17時58分：津波注意報解除
津波の最大波(観測値)	大船渡：8.0m以上(15時18分) 釜石：4.2m以上(15時21分) 久慈：8.6m以上(15時21分) 宮古：8.5m以上(15時26分)
大槌町での浸水面積	約4km ² (住宅地・市街地面積の52%)
津波浸水高	吉里吉里：16.1m 吉里吉里漁港東側：22.2m 赤浜：12.9m、安渡：13.7m 新港町：12.7m 大槌町役場付近：10.7m 浪板(津波遡上高)：19.1m

出所：大槌町「東日本大震災津波 大槌町被災概要」2015年。

表2 地区別建物の被害状況

地域名	全壊	半壊	一部損壊	合計
町方	1,690	4	1	1,695
桜木町・花輪田	197	346	7	550
小枕・伸松	100	2	0	102
沢山・源水・大ケ口	197	162	99	458
安渡	665	18	17	700
赤浜	272	6	11	289
吉里吉里	395	38	34	467
浪板	63	4	12	79
大槌	0	0	5	5
小鎚	0	6	21	27
金沢	0	2	1	3
合計	3,579	588	208	4,375

出所：大槌町「東日本大震災津波 大槌町被災概要」2015年。

表3 地域別の死者および行方不明者数（関連死を除く）

地域名	人口 (人)	身元判 明者 (人)	行方不 明者 (人)	死者 数(人)	死者 率(%)
町方	4,483	329	279	608	13.6
桜木町・ 花輪田	1,421	28	2	30	2.1
小枕・伸松	272	24	12	36	13.2
沢山・源水・ 大ケ口	3,104	103	14	117	3.8
安渡	1,953	150	49	199	10.2
赤浜	938	57	36	93	9.9
吉里吉里	2,475	74	23	97	3.9
浪板	404	15	10	25	6.2
小鎚	499	24	3	27	5.4
金沢	509	1	1	2	0.4
合計	16,058	805	429	1,234	7.7

出所：大槌町「東日本大震災津波 大槌町被災概要」2015年。

コミュニティ度の高いとされる安渡地区および赤浜地区と比べて高い数値を示している。被災地区の人口の動向は、住宅再建の用地が地区内に満たされているかにも左右される。安渡地区の人口減少にはこうした基盤の面で困難な要因が作用している。ちなみに浪板地区は、被災戸数やエリアが限定的であったために人口減少も限られている。

4 地域の力——地域共同体としての対処力

人口統計のトレンドでは消滅することが予測されつつも、ことはそれほど単純ではなく重層的な調査が必要で、参与観察、関与観察的な調査や、アクションリサーチが意味を持つてくる。各種のフィールドワークや内在的な地域理解から、この地域には「地域の力」があり、「復元回復力（レジリエンス）」がある。地域共同体が持つ力が、この時代に即応しつつ維持・展開されていると思える。それは「公助」「共助」「自助」の三つの中で、「共助」の質の高さと広がりの意味している。とはいえ、すべてが「共助」だけでは解決できないので、「公助」により確保された基盤のうえに、

表4 大槌町津波浸水地区の人口減少

被災（浸水） 地区	2011年 2月	2022年 3月	比率 (2022/2011)
町方地区*1	3,940	970	24.6%
小枕地区	272	67	24.6%
安渡地区*2	1,953	558	28.6%
赤浜地区*3	938	608	64.8%
吉里吉里地区*4	2,475	1,748	70.6%
浪板地区	404	314	77.7%
大槌町	16,058	11,065	68.9%

*1：上町（除花輪田）、本町、大町、未広町、新町、須賀町、栄町

*2：安渡1～3丁目、港町新港町

*3：赤浜1～3丁目

*4：吉里吉里1～4丁目

出所：大槌町民生部町民課（2014年4月1日現在）。

「公助」との連携において発揮される拡張した「共助」の威力ともいえるべきである。こうした力を「地域共同体の対処力」として注目したい。

地域で発揮される「地域共同体」を基調として発揮されてきた力の諸場面を、ここでは、3次元に整理して、発災から復興の現状（2023）までの吉里吉里地区の経過や到達点から明らかにしたい。地域共同体で発揮される力を、三つの次元で区切ると、Ⅰは、「共同体としての緊急事態への対応力」、Ⅱは「非日常生活における共同の対処」、Ⅲは「非日常生活における共同の対処」である。

被災した人が、引き続きこの地域に住み続けると決断するには、なりわいや家族のことなど個々人の事情以外に、地域社会の状況も大きく作用すると思われる。もちろん、これは個々それぞれの選択にも関わっている。地域共同体のガバナンス力や、凝集性や、地域文化や自然環境の維持管理状態などもろもろの要因が関連する。地域共同体の力の発揮具合に関して、居住の安心・安全、自己実現やアイデンティティとして重視する人々やファミリーにとっては、そうした共同体の様相は重要なポイントなのである。

吉里吉里地区の人口が、ほかの甚大な被災エリアと比べて維持できていて、相対的に復興の度合いについての住民による評価が高いのは、こうし

た地域共同体的な総合力と不可分ではないと思われる。この三つの次元の共同体の対処力がどのように発現されるかは、地域社会の特性により多様ではあるものの、東日本大震災により最も甚大な被害を受け、自治体の存続も危機と評価された大槌町の1地区である吉里吉里地区において、どのように発揮されているのかについて、解明する意義があるといえる。

5 地域之力その1 「共同体としての緊急事態への対応力」

I 共同体としての緊急事態への対応力としては、A：救急救命時および避難時の対応、B：次の災害への備え、C：復旧・復興時の対応、の三つの段階ごとの諸課題が、大災害が発生した後に急浮上する。

災害の諸段階の中には、復旧・復興と関連して、次の災害への備えも含まれるだろう。東日本大震災の被災状況を検証し、事実を記録化しつつ、人々が記憶して伝承するなどの過程のなかで、地域防災の計画を確立していくことが、地域社会が持続的であることの重要な要素の一つである。大槌町吉里吉里地区は、これらの諸段階を着実に歩んできたといえる。

5.1 吉里吉里地区における地域之力 ——災害対応

この吉里吉里地区では、公助が頼りにできない時に発揮される地域之力、いわば地域のガバナンス力が発揮された。

地域之力が発揮された第一は、災害時の緊急対

応である。発災から次の災害への備えまでの共同体的対処である。災害救助や復興事業の中において、地域社会が事実上ガバナンスの主体であったり、公的な諸手続きに地域共同体の視野から参画したり、緊急事態への対応力が発揮された。

救急救命時（避難、救助、安全確保等）には、消防団員は水門を占め、避難広報で住民の高台避難を呼びかけた。住民は隣近所で声を掛け合うなどして、高台へと向かった。しかしながら、津波は防潮堤を乗り越え、気象庁が最初に発表した高さの数倍に及ぶ高さとなり、ある程度の高台に避難したつもり住民をも犠牲にした。

避難時（避難所運営、捜索、瓦礫撤去等）の段階において、公式の避難施設の一部は被災し、地区主導の避難所運営が8月まで続いた。地区内の町内会は、在宅の被災者に物資を供給する体制を構築した。地区の医療・保健・福祉・各種技能者・事業者の協力体制が構築された。

吉里吉里地区では、公式の避難所が「吉里吉里小学校」「吉里吉里中学校」「公民館吉里吉里分館」の3カ所である。このうち「吉里吉里中学校」と「吉里吉里分館」は、被災や浸水により、避難所とすることは断念された。その代わり「堤保育園」「吉祥寺」「若葉会館」「らふたあヒルズ」「三陸園」そして「吉里吉里地区体育館」が使用された。この地区では、公共施設ではない民間の施設が緊急事態に威力を発揮したのである。また、各避難所の運営が住民によって実施されたため、この地区の避難所担当として配置された役場職員を大槌町役場の災害対策本部に引き戻させたのである（麦倉ほか 2013；麦倉 2021）。

元々、1889（明治22）年の合併の前は、周辺の地区である赤浜地区、浪板地区とあわせて吉里吉里村を形成していた。自治体としてのガバナンス

表5 地域之力I「共同体としての緊急事態への対応力」

地域之力の3つの次元	具体的な課題	地区における課題への対処状況
I 共同体としての緊急事態への対応力	A 救急救命時、避難時の対応 B 次の災害への備え C 復旧・復興時の対応	A 避難行動、避難所運営、行方不明者の捜索においても地域力を発揮。 B 地域自主防災計画の作成、公民館内に地区の担当者を委嘱。 C 復興まちづくり計画において主導的に参画、調整に貢献。

表6 大槌町吉里吉里地区で開設され地区住民によって運営された避難所（岩手大学調査）

避難所名称と被災状況		分類	避難者の数 (人)						閉鎖日
公民	避難所名		3月11日	3月12日	3月18日	4月1日	5月1日	6月1日	
公式	吉里吉里小学校	町施設	300	300	300	300			4月末
	堤保育園	民間	54	54	0				3月16日
公式	吉里吉里中学校	浸水 町施設	45	7	25				3月25日
	吉里吉里地区体育館	町施設				130	130	130	8月10日
公式	公民館吉里吉里分館	被災 町施設							
	吉祥寺	仏閣	240	240	185	95			4月末
	若葉会館	町内会	60	60	20	20			4月末
	らふたあヒルズ	民間	300	153	8				3月20日
	三陸園	民間	上に含	上に含	上に含	上に含	上に含	上に含	3月20日

出所：麦倉哲ほか（2013）。

の経験をもつ子孫によって主に形成されている。

5.2 地域の方

—Bの課題について、自主防災計画の策定

この地区では大学教員らの協力により、災害の検証を独自に進めた。この地区の災害検証をも含めて、地区の自主防災計画策定のための検討会が発足した。検討は2013年3月に始まり、「被災状況と避難行動の検証」「地区における災害避難の課題と対応」「地域防災に向けた地域住民による取り組み」「自主防災計画づくりに向けた図上訓練

練の実施」「自主防災計画案（たたき台）の検討」などのステップを踏んで第7回の検討会を経て計画案を策定した。2014年7月、検討会メンバー



写真2 自主防災計画策定検討会の様子

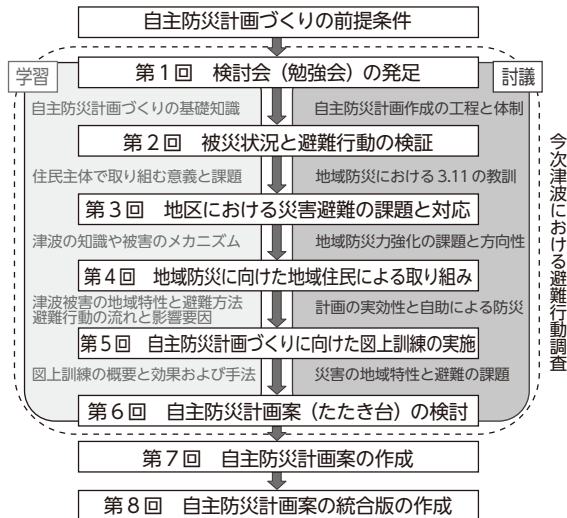


図1 吉里吉里地区の自主防災計画策定検討会の流れ

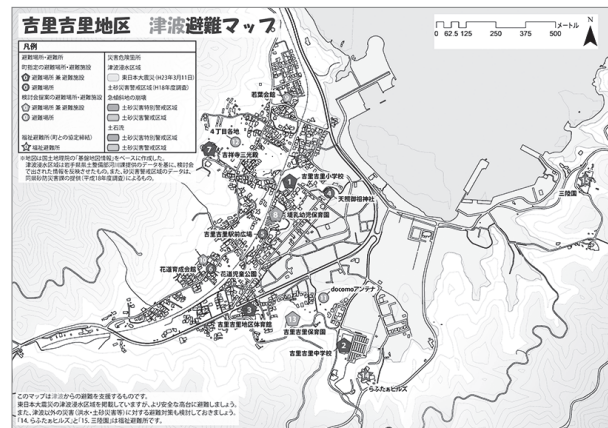


図2 津波避難マップ

出所：吉里吉里地区自主防災計画策定検討会。

は吉里吉里地区地域自主防災計画案を大槌町長に提出し、吉里吉里地区と大槌町とのその後の協議を提案した。自主防災を検討する過程で津波犠牲死者の調査（岩手大学と共同）も実施した。

吉里吉里地区では、その後、暫定案を全世帯に配布して意見を集約し、2015年3月に「自主防災計画版の避難マップ」を完成させ、土砂災害を考慮した避難マップも作成した。その後、この計画は、道路等のインフラ整備や住宅復興等の整備状況を踏まえ、改訂が必要となっている。

5.3 Cの課題について、地域の力 ——復興まちづくり計画において

津波で家が流されたエリアは、復興まちづくりの中で対策が検討されるが、この過程で権利関係者や地域社会のリーダーたちが、復興まちづくりの協議に積極的に参画したことで、各種の調整がなされ、地区内での住宅再建の可能性が具体化される一助となったとみられる。津波によりインフラが破壊され、事業所や住居が多大な被害を受けた吉里吉里地では、インフラ整備や街区の策定、かさ上げ工事、浸水域並びに防災集団移転地における宅地の整備等の計画的な対応が必要となった。

最終的に完成した復興まちづくり事業は、2022年度の日本土木学会の優秀賞を受賞することになった³⁾。しかし、この受賞は、この事業計画に関わった専門家や設計者や応援職員のたぐいまれな貢献によるものばかりに結論づけられるものではない。この過程に関わった住民権利関係者や、住民リーダーの介在によるところが小さくないのではないか。復興に関する地元の協議は、権利関係に限定することなく参加型で進められ、まちづくりの懇談や協議にあたっては、住民の意見・要望を調整するために、声を吸い上げ反映させるような努力が図られたのである。

土木学会の受賞者で名が挙げられている地元関係者は、藤本俊明（地域復興協議会長）のみであるが、この藤本の背後で多くの住民の意見が出され調整が図られた成果が、受賞につながったのではないか。藤本俊明（吉里吉里地域復興まちづくり協議会会長）は住民代表として復興計画の住民

意見をとりまとめ、調整にあたったのである。住宅再建における参加型の対応が光ったといえる。災害発生時や、防災計画の策定や、そしてこの復興における個別の住宅再建においても、住民間の連携が際立っていた。

2011年8月の町長選挙で当選した碓川豊は参加型で情報公開型の方式を重視した。2011年10月から、大槌町は被災エリアを10地区に区分し、住民参加型の地域復興協議会を発足させた。吉里吉里地区復興懇談会は2011年10月から4回、吉里吉里地域復興まちづくり懇談会・まちづくり協議会は2012年6月から7回開かれた。これらの会議には、多い時で地域住民の200人以上が参加した。

その中で、注目すべきエピソードがある。地区復興まちづくり協議会がスタートして、最終的に区画整理事業の地区内に公営住宅を建設する計画図面が出された時（図3）に、画期的な意見が出された。公営住宅を集中して配置すると公営住宅と再建住宅との違いが目立ってしまうので、配置を分散して、いかにも公営住宅とわかるようなデザインにしないようにとの意見である。設計者は住民の意向を踏まえて、図4のように、配置を組み替えたのである。図3では、災害公営住宅（戸建て、長屋）が街区の中心部に集中している。一方で、図4は、集中していた公営住宅（戸建て、長屋）を分散させている。

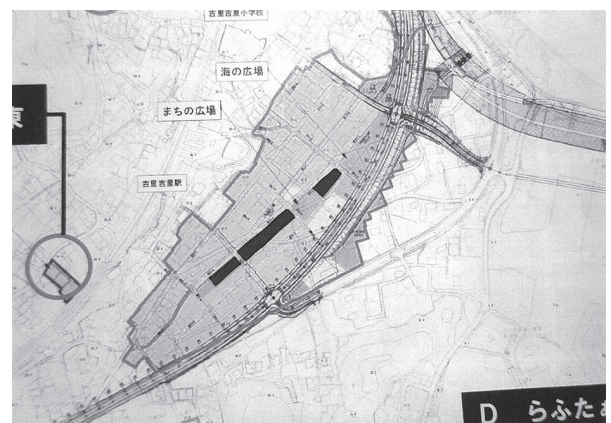


図3 復興まちづくり計画における公営住宅の配置

出所：吉里吉里地域復興まちづくり懇談会資料。

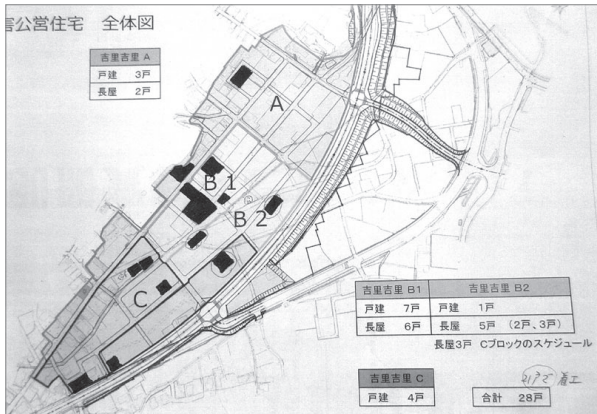


図4 復興まちづくり計画における公営住宅の配置(変更)
出所: 吉里吉里地域復興まちづくり懇談会資料。

5.4 Cの課題について〈続〉

—被災住宅世帯の住宅復興状況(地区に住む・町内に住む世帯の割合)

被災後の人口の増減を左右するのは、被災した住宅の再建の如何である。この地区で被災した建物は467棟で、全壊と半壊を合わせても433棟である。しかし、この建物の中には、自宅の離れの建物や附属の建物も含まれており、また事業系の建物もある。そこで以下では、住宅系の建物の再建の推移について、聴き取り調査の結果から分析する。

①建物の属性

まず、住宅の棟数(戸数)については、住宅以外の棟数をカウントし住居系の棟数を確定しなければならず、住居と住居以外を精査し分類した。住居系以外をカウントすると被災建築物は400棟を超える。しかし、非住居系の再建はハードルが高い。住宅再建支援金のような災害救助がえられないからである。

②住宅の家、住民のいた住宅の戸数

被災時に住民のいない住宅(空き家や住民票を置いてない住宅)も復興支援の対象とはならず、再建が困難な建物である。そこで、住民がいなかったかどうかについても住宅利用状況の精査が必要となる。2022年の調査段階では、これを26棟とカウントした。不在住宅の多い地区では復興は困難だが、本地区は不在住民が多くはなかった。このことが住宅再建の比率を高くしていると

いえる。

③罹災住宅の復興・再建状況、2022年段階

非住居系と不在住宅を除く333棟について、個々の家に住んでいた世帯の住宅における復興状況を追った。「吉里吉里地区被災住民住宅の復興状況に関する全数調査」(2022年実施、一部継続)である。この住宅に住んでいた世帯が吉里吉里地区や大槌町に住み続けているかどうか、またどのような住宅での復興状況であるのかが、吉里吉里地区の人口やコミュニティの現状を左右しているのである。

まず100人が被災犠牲死者となっていることを考えると、相当数の住宅は消滅の危機にあったといえる。他方で、住宅に甚大な被害を受けた住民は、復興まちづくりの施策の中で「区画整理」「防災集団移転」「災害公営住宅」「自主再建・自力解決(町内)」などを選択し、住宅復興問題に対処してきたのである。その対処の内容を8分類にしたのが表7である。「1:従前住宅」「2:区画整理」「3:防集移転」「4:自力再建・自力解決(町内)」「5:災害公営住宅(町内)」「6:自力解決・世帯統合等(町外)」「7:滅失」「8:施設等一時居住」の8類型である。調査時点で流動的なのが下方の2類型(「滅失」「施設等一時居住」)である。また、本集計では、不明については集計から除外した。

吉里吉里地区の復興まちづくりの過程において人口減少に歯止めがかかったのは、地区内および町内において住宅再建や自己解決をする人が多かったからである。分類でいう「6:自力解決・世帯統合等(町外)」「7:滅失」「8:施設等一時居住」の数が少なく、復興まちづくりの中で、総じて居住継続の方向で解決が図られたことによるのである。

次に、災害復興住宅の代名詞のような「区画整理事業」「防災集団移転事業」「公営住宅」もそれなりにみられるが、いちばん多数の占めたのは「自力再建・自力解決(町内)」である。これは町内で自力再建した住宅と、他の家族・親族と同居するなどで、町内に住み続けるために住宅問題に対処したものである。かさ上げ工事を伴う土地整備期間の長期化を考慮して(また、再建築不可となったために)他の場所に土地を求めた者や、親族や他の親密な人との関係により自力解決した者

表7 分類した戸数・比率

NO	色別	再建類型	比率	実数	継続
1		従前住宅 (橙)	12.9%	42	継続
2		区画整理 (緑)	17.8%	58	継続
3		防災集団 (紫)	17.5%	57	継続
4		自力 (町内、青)	19.7%	64	継続
5		公営住宅 (黄)	11.4%	37	継続
6		自力世帯統合町外 (桃)	12.6%	41	
7		滅失 (白)	7.4%	24	
8		施設等一時居住 (赤)	0.6%	2	継続
			100.0%	325	

などが含まれている。この比率の多さがこの地区(町内)への居住の継続を支える一つの要因であったと考えられる。「従前住宅」は津波被害エリアの境界線近くの住宅で、主として「半壊」や「大規模半壊」の被災住宅の場合である。大規模半壊の住宅は、修繕のうえ居住継続する割合が高かったと思われる。防災集団移転の住民は、被災したエリアが再建築不可となった影響を受けたことによるケースが多い。地区内の高台の移転地は数カ所あるが、再建築不可のエリアとなった近隣住民がこぞって同じ高台を選択するという例も顕著で、こうした点からも、地域の親密性がうかがえる。

また、災害公営住宅は現状の復興政策において不可欠な対策であるが、従前の持ち家層が被災の結果、非持ち家層に移動するという面を示すものであった。しかし、こうした公営住宅層に対しても地域社会内のインクルーシブな配慮がうかがえるのである。

「町外転出」はそれぞれの世帯の事情による選択の結果でもあるが、他方で、新たなる転入や世帯分離などにより、住宅が増加するケースもこの地区内にはみられる。住宅再建の種別としてこの8分類が妥当かどうか、分類の妥当性の再点検と分類不明の住宅の精査が今後さらに必要である。

④ここから何がいえるか、さらなる検討を

この調査結果からは、住宅消滅、町外転出の少なさがある程度示されている。住宅再建の多様な

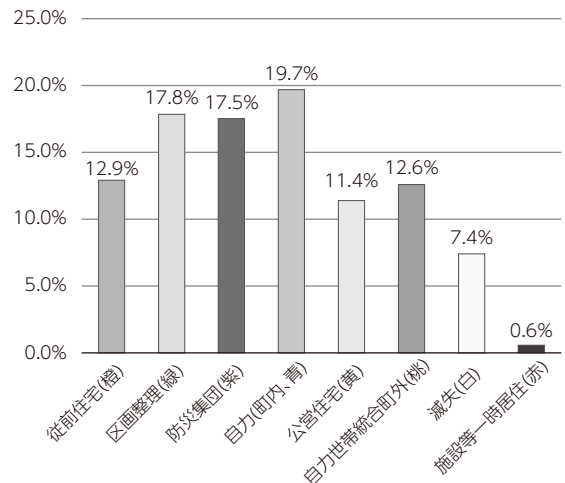


図5 分類した住宅の比率グラフ

選択肢が活用された効果もあったといえる。区画に建築、防集を活用した建築などのほか、自宅再建では地区内の縁故で土地が活用されるなどがみられた。また、この罹災者とは別のこととして、新規の住宅建設もあった。世帯や住宅への甚大な被災に対して、この地域社会のもつ特色は発揮された面があるのではないかと。単に、個々バラバラな住宅問題への対処の結果ではなく、この地域社会特有の復興の様相がうかがえたのである。またこの地区では公営住宅の空家率が極めて低い。妥当な戸数の公営住宅を建設したとみられる。あらたに再建された住宅エリアや近隣関係から、そして被災エリアと非被災エリアとの交流の深まりから、あらたなコミュニティの胎動が芽生えているのである。

復興まちづくり、住宅の再建について「吉里吉里10年目住民調査」からは、次のような回答があり、吉里吉里地区住民の共同体的な特性が示された。

被災後から毎日瓦礫の撤去に参加した。……高台移転の為に土地造成工事が始まり、丁度私の家の近くに6戸の土地造成があった際、工事関係者に夏は冷たいコーヒー、冬は暖かいコーヒーを毎日午前と午後提供した。これも自分が流されなかったため、被災者が1日でも早く元に戻ってほしいという思いで。

(70歳代男性:当時60歳代:「吉里吉里10年目調査」より)
失った店舗(仮設で営業)を少しでも早く再

建し、地域の利用者の不便を解消したい一心だった。2020年7月念願がかなったが、地域の関係者の協力に感謝している。

(70歳代男性)

地震が発生したら命を守る行動を起こす、情報収集して避難すること。

(70歳代男性)

家が残ったということで精神的苦痛は大変でした。その気持ちは10年間変わらなかった。たぶん死ぬまでであろう。それでも前を向いて歩いて行きます。生きることは皆平等であると思うから。

(60歳代女性)

6 II：日常生活における共同的対処

地域共同体の力が発揮される第二の面は、「II：日常生活における共同的対処」である。それを三つの課題に分けてみると、A（コミュニティ）町内会・自治会活動の再興・活性化、B（社会的包摂）地区内の社会的包摂・保護・育成、共助的な基盤の再興築、C（自発的活動）地区内の各種団体・組織活動の活性化の三つである。

Bについては、民生委員など、地域社会のソーシャルワーク的な役割を担う人の継承が重要である。実際この役割を継続したり継承している人が、地区内の困窮者に配慮し相談にのっている。また、地区には、乳幼児園や保育園、高齢者福祉施設を営む地元の事業者が基盤を持っていて、地区の保育や福祉のサービスに貢献している。また、お寺や神社と縁の深いこの地区では、護持会での包摂や、氏子会での包摂も、地域住民を包み込むものである。かくして、日常生活における地

域共同体的な対処のなかで、社会的包摂の力も一定程度は発揮されているのである。

Cについては、地区内の多種多様な団体活動、サークル・趣味の会の活性度であるが、この地区では、C：吉里吉里国の活動、Willの会（桜を咲かせる活動団体）の活動、全町的な活動であるが、この地区に中心人物を配する「はまぎく若だんな会」（地区を超えた会）の活動、震災直後には中断していた地区婦人会の活動、大槌町漁協女性部の活動、ガールスカウトの活動などがみられる。

6.1 A（コミュニティ）町内会・自治会活動の再興・活性化

町内会・自治会活動の活性化について、吉里吉里地区は従前の活動においても活発であったので、被災後の再興築が課題であった。こうした中で、復興まちづくりのセンター的な場所に、吉里吉里公民館（正式名称は、大槌町中央公民館吉里吉里分館）が再建された。その近くには、同じく被災し再建された大槌町消防団第三分団の屯所もある。新しい公民館は復興まちづくりの区画整理エリアの中央に位置し、地域住民のアクセシビリティはこの上なくよい。しかしながら、次の津波の際には、避難所とはならない。このことを地区住民に周知徹底しての開設であった。地区のこの公民館では、岩手大学社会学研究室が運営する心の復興サロンや伝承サロンも開催されてきた（岩手大学教育学部社会学研究室 2020：15, 23；麦倉 2021：47；麦倉 2022：7-9）。

2018年4月23日には、地区の主催で吉里吉里公民館の落成式典が挙行された。式典は、大槌町役場の式典とは別に吉里吉里地区の主催で実施さ

表8 地域の力II「日常生活における共同的対処」

地域の力の三つの次元	具体的な課題	地区における課題への対処状況
II 日常生活における共同的対処	A（コミュニティ）町内会・自治会活動の再興・活性化。 B（社会的包摂）地区内の社会的包摂・保護・育成、共助的な基盤の再興築。 C（自発的活動）地区内の各種団体・組織活動の活性化。	A 従前5町会を4町会に再編。越郷会と結和会が新たに発足。 B 民生委員が継承、護持会、氏子会が継承。 C 吉里吉里国、Willの会（桜を咲かせる）若だんな会（地区を超えた会）、婦人会、漁協女性部、ガールスカウト。

れ、来賓として大槌町長ほか役場幹部や内外関係者が招待され、公民館の庭では伝統芸能の虎舞が披露された。また、津波浸水域として被災エリアを多く含んでいた、従前の3丁目町会、2丁目町会、1丁目町会が再編され、新たに「越郷会」「結和会」が発足したことも披露された。同年4月1日、同じ日に、この二つの新しい町内会がスタートを切ったのである。

再編され、新しく誕生した町内会では町内会の歌をつくる人が出た。越郷会の歌である(資料1)。

各種の地区の行事を再開させてきた。復興町づくりの進展にともない、新しい町内会の発足に至るまでに、この地域で地域社会を復興をさせる活力を躍動させる数々のイベントが実施された。

地域共同体の基礎が再建されると、地域住民であり続けたい人々の磁場が形成され、復興の諸段階における地域共同体の活動力が発揮され、地域住民を包摂する各種の活動や復興のイベントが開催された。

かくして2014年には、その象徴的なイベントとして、この地域を元気づけるイベント(明日の吉里吉里住民プロジェクト)が実施された。従来から実施してきた行事を再開させる契機となった。その中の一つは、若手事業者の会(はまぎく若だんな会)が中心となり吉里吉里海岸にて「砂

越郷会の歌
 作詞 平野利輝 作曲 石川嘉一

- 郷(さと)の丘を越えて うるわしき透明な風が
生まれいずる彼方から 優しく、時には激しく
与えしこの風を ころろに受けて
越郷の友よ 明日へ羽ばたこう
- 郷(さと)の丘を越えて なつかしき友の風が
思い出運びながら 暖かく、時には鋭く
与えしこの風を ころろに受けて
越郷の友よ 明日へ羽ばたこう
- 郷(さと)の丘を越えて きらめく未来の風が
そのメロディーを音にして 眩しく、時には一筋に
与えしこの風を ころろに受けて
越郷の友よ 明日へ羽ばたこう

資料1 越郷会の歌
出所：越郷会。

元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクト

1. まちづくりの方向
吉里吉里では、みんなで将来のまちのことを考えました。復興後も、地域の活力を維持していけるのだろうか？
若者が定着するように、高齢者が安心して暮らせるように、以下の事項が必要だと考えました。
①子育て環境 ②高齢者・子育て世代の働く場づくり ③高齢者の見守り
④住民が交流できる場 ⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR

2. 元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクトの始動
まちづくりの方向に沿って、何に取り組むべきかを考えました。
しかし、すぐに対応できるものばかりではありません。例えば、子育てできる環境で、学童保育が必要という考えができましたが、すぐに建物を建てて事業を開始することはできません。そこで、夏休みのサマースクールから始めようといったかたちで、平成26年度の1年間で住民が実施できるプロジェクトを実施することとし、19の事業に取り組みました。

①サマースクール 長期休暇に大学生ボランティアによる小学生を対象とした学習指導等。(約50名の児童が参加)	①子育て環境
②海水浴用イカダづくり 吉里吉里海岸に子ども達が海水浴を楽しむようイカダを設置。	①子育て環境
③こども漁業学校 小中学生を対象に吉里吉里の漁業を体験・レクチャーするプログラム。	①子育て環境
④吉里吉里マルシェ 震災前に実施していた朝市を改良復活。新しい雇用の場づくりをめざし、イベント的に店舗を開設。	②高齢者・子育て世代の働く場づくり
⑤移動販売 高齢者や工事関係者などへ、移動販売車(キッチンカー)でカレーなどの食料品等を販売。	③高齢者の見守り
⑥交流サロン 住民がいつでも気軽に集まれる場として交流サロンを開設。	④住民が交流できる場
⑦リラクゼーション事業 復興を支える若い女性たちが、交流できる癒しの場づくり(エステサロンの開設)。	④住民が交流できる場
⑧飲食店事業 よってんせいの夜間営業により、若い世代をはじめ、住民が夜交流できる場をつくる。	④住民が交流できる場
⑨他市町村との交流 紫波町との交流活動・イベント等	④住民が交流できる場
⑩吉里吉里大運動会 震災前に実施されていた吉里吉里大運動会を復活開催。(約200名が参加)	④住民が交流できる場
⑪地域ブランドの開発 吉里吉里独自の物産の開発。「わかめかりんとう」と「わかめカレー」を開発・販売。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑫砂の芸術祭 吉里吉里海岸の砂を活用したサンドアートづくりコンテスト。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑬サーフプロジェクト SUP(スタンドアップパドルサーフィン)を吉里吉里の名物にするための体験・PR活動	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑭ビーチバレー大会 吉里吉里海岸で、新たなイベント:ビーチバレー大会を実施。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑮薪まつり 吉里吉里の森林を活用した薪割り体験や自然の大切さを学ぶセミナーを実施。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑯吉里吉里甚句の保存 吉里吉里甚句をDVD化し、今後も継承していく。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑰伝統芸能の普及 様々な機会で、吉里吉里の伝統芸能を披露、他地域への普及。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑱観光マップ等の作成 吉里吉里のまちの案内や元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクトを紹介するパンフレット作成。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR
⑲PR事業 フェイスブックで、元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクトをPR。	⑤吉里吉里の誇り・魅力の共有・PR

サマースクールの様子
吉里吉里マルシェの様子

吉里吉里大運動会の様子

資料2 2014年元気いっぱい「明日の吉里吉里」住民プロジェクト
出所：大槌町公民館吉里吉里分館。

の芸術祭」(海岸の砂を材料として芸術作品を制作するイベント)を復活させたことである。

共同体の日常的な対処力は、環境整備においても発揮された。地域の活動力は、地区内の自然環境整備や生活環境整備においても、力を回復しつつ発揮された。従前と変わらない環境整備活動が再開された。これには、共同的対処の年間イベントとしての海岸清掃、墓地や神社、公民館の清掃が含まれる。

集団としてではなく、各自の自主的な活動としての環境整備、環境美化活動も実施されている。吉里吉里海岸の清掃、寺の草取り、神社や公民館の掃除、道路の環境整備などに参加し取り組む人が多いのである。

「吉里吉里10年目住民調査」からは、

震災前は町内会の班活動で行っていた草刈り作業が行われなくなったため、10年間夫婦で国道の草刈り作業を月1回必ず行ってきた。お寺の草刈り作業も必ず参加した。

(60歳代夫婦)

地域の活動について積極的な参加。

(60歳代男性)

6.2 B (社会的包摂) 地区内の社会的包摂・保護・育成、共助的な基盤の再構築

社会包摂的な活動として、生活に困窮した人への相談にのる民生委員の活動がある。民生児童委員等の、行政から委嘱を受けつつ地域社会内の人々から相談を受ける人の活動は重要である。

地域社会の中には多様な人々が住み、それぞれの人生の段階を歩んでいて、また時には困難に直面している人や世帯も含まれる。地域の力の発露として、一人ひとりの支えあう力の発揮は重要な意味をもつ。

そうしたことを踏まえると、助け合い的な「共助」の機能がどれくらい息づいているかも重要な地域の力の要素である。ソーシャル・インクルージョンや弱者・困窮者支援といってもよい地域共同体の活動の広がりや包摂性を示しているかどうかは鍵である。

家があること、仕事があることの2点だけが住む場所を選ぶ理由ではなく、それ以外の多様な理由が多層に重なることで住みたい場所が決まる。住む場所で地域活動に参加する、あるいは参加しなくてもそのような共同体色ゆたかな地域に包摂されることに住む理由が見いだせるのである。

公的に委嘱されている方々以外にも、自発的な活動を営んでいたり、仕事まわしたり、物資を提供したり、聞き役に回ったりなど、孤立した人たちに配慮している人がみられる。被災から10年目の吉里吉里地区住民調査からは、この点、数多くの記述がみられた。

〈吉里吉里10年目住民調査より〉

『人と人のつながりは大事にしている』『笑顔』『助け合い』、子どもたちが安心、安全に住める環境。

(30歳代)

大槌の自然のすばらしさに感動し、移住してきました。ここのすばらしさを多くの人に知ってもらいたいと思っています。(30歳代)人に優しく接する事。困っている人がいたらとりあえず聞いてできる事はする。

(50歳代女性)

被災した方の話に耳を傾けて来た。欲しい物(不足している物)を分けてあげた。

(60歳代女性)

兄弟、親戚、知人に大変お世話になりました。相手を気づかう事によって自分も大事にされるという事です。これからあと何年(1年、2年)かもしれませんが、相手を気づかうという事が、子、孫達が自分に似ている様にねがう。

(80歳代男性)

自分とか家族とか大切に思って来たが、自分達より被害の大きかった方々に思いやりを少しでも持って過ごすようにして来ました。家族が一番ですが、吉里吉里地区の為に少しでも役立つ生き方をこれからもやるようにして行くつもりではいます。

(60歳代男性)

大事にして来た事は家族の絆です。……お店で働きながらお客様の被災の時のお話を聞いてあげたり、励ましてあげたり、それだけで笑顔になる方が沢山いらっしゃいました。被災前より心を開いてくださったお客様もい

らっしゃいます。人と人の繋がり大切さを
感じる瞬間が何度もあり、それも喜びです。

(60歳代女性)

6.3 C（自発的活動）地区内の各種団体・ 組織活動の活性化について、

新公民館が誕生し、震災後から引き続き任に当
たっている分館長の柔軟な奥深い配慮により、吉
里吉里分館の利用効率は高く、多種多様な団体の
活動が繰り広げられている。

各町内会の会議やお茶っこのほか、数独の学習
会、小物の制作、フォークダンスなどの団体活動
等々がみられる。筆者も公民館の1室を借りて、
吉里吉里地区の復興状況について、地域の方々と
検討会を重ねている。

こうした自発的なグループ活動も、この地域社
会の共同の力が発揮される一面として重要であ
る。多様な団体活動の展開にも、共同的な対処の
力量が多々垣間みられる。地域に根を置く団体活
動があるのである

伝統芸能の諸団体のほか、復活の薪を提唱した
吉里吉里国、若手事業者の「はまぎく若だんの会」
(町全域)、WILL さくら（毎春、美しい桜を咲か
せ、記念樹も植える）、その他、公民館等を拠点
に活動する諸団体が、地区に活気をもたらしてい
る。

7 Ⅲ：非日常生活における共同的対処

共同体的な力が発揮されるジャンルとしては、
「Ⅲ：非日常的な共同体対処」も重要である。こ
の力の再建・継承がいかになされてきたか。この
力は、地域社会の集合表象における凝集力を高め

つつ、また維持するために重要である。この力
の発揮により、地域社会への帰属意識の確認・再
確認がなされる。この力には、A、B、Cの三つの
課題がある。Aは集合表象、地域文化の継承する
活動、Bは地域をあげての祭礼等、Cは地域をあ
げての行事・イベントである。この地域社会では、
被災から復興の諸段階をへて、共同体の非日常
的な対処の力が、存分に発揮されているといえる。

Aについてこの地域では、伝統芸能団体活動
の継承・展開があげられる。Bについては、吉里
吉里祭りの開催があげられる。Cについては、吉
里吉里大運動会を敢えてあげたい。

7.1 A 集合表象、地域文化の継承する活動

共同体の力が発揮された非日常的な集合表象
の行動としては、伝統芸能活動が挙げられる。地
域住民のアイデンティティを再確認し、その意
識を高め、地域文化を表象しつつ、地域のさま
ざまな世帯や個人を包摂し、帰属意識を高める
のである。

地区をあげての行事の代表例が、①吉里吉
里祭（神聖な面を持つ儀式）と②運動会（全参
加型の共同のイベント）ではないだろうか。

非日常的な活動として、ここではいくつかを
特化したい。住民の参加の度合いが高く、自
発性の度合いも高く、地域の伝統文化に通じ、
それを継承する神聖な意味合いを共有できる
イベントである。

集合感情が沸き上がるイベントに参加し、
担っていくことで、住民自身がこの地域社会
の一員に属しているというアイデンティティ
を再確認するので、そういう意味から重要な
意味を持つのである。伝統芸能は、世代を
超えてこの地域の歴史や神聖性と自分自身
や自分の家族がつながっているということ
を、普段の日常とは違って実感するの

表9 地域の力Ⅲ「非日常生活における共同的対処」

地域の力の三つの次元	具体的な課題	地区における課題への対処状況
Ⅲ 非日常生活における共同的対処 集合表象 凝集性の確認（地域社会への帰属意識を、 アイデンティティの確認・再確認）	A 集合表象、地域文化の継承する活動 B 地域をあげての祭礼等 C 地域をあげての行事・イベント	A 伝統芸能団体活動の継承・展開 B 吉里吉里祭り C 吉里吉里大運動会ほか

である。

ところでこの地区では、犠牲者を慰霊・追悼する式典を実施してきた。(2011年から)地区での被災行動を解明し、また犠牲死者を忘れない「生きた証」事業にも積極的に取り組んだ。東日本大震災の犠牲者を忘れずに記録し、慰霊しているとする活動においても、他の地区と比べても熱心な活動が展開されたのである(麦倉 2017:144-145; 麦倉 2022:4, 6-7)。

7.2 B地域をあげての祭礼等 地域力 —慰霊・追悼/生きた証

非日常的で神聖な行事の代表として、吉里吉里祭りがある。地区の天照御祖神社に奉納されるかたちで、伝統芸能団体のそれぞれの舞が披露される。吉里吉里祭りの時には、神輿が繰り出される。日中の神輿の巡行に従って、吉里吉里獅子踊り、吉里吉里虎舞講中、吉里吉里大神楽、手踊りの諸団体は、地区内の全域を演じて回る。

一時は、東日本大震災の被災後、そしてコロナ感染症の流行の影響で中断したものの、2023年に二度目の再開がなされた。祭の準備期間には、伝統芸能団体指導者が吉里吉里学園中学部を訪問し、生徒に指導を行っている。中学生は、吉里吉里まつりの準備のために、地域の先輩方を師匠として学び、心身にその伝統の技を刷り込ませている。図6では大槌町における虎舞が4団体となっているが(1992年現在、安渡虎舞、吉里吉里虎舞、向川原虎舞、陸中弁天虎舞)、1996年に「城

山虎舞」が発足して、大槌町で5団体となった(大槌町文化遺産活性化実行委員会 2015)。

7.3 C地域をあげての行事・イベント

この地区の長年の恒例行事は吉里吉里地区大運動会である。この運動会は、地域社会全体の主催の一大イベントであり、小学校のグラウンドを使い、町内会対抗の競技で研鑽の度を競っていく。

地区大運動会は一大イベントであり、かつては吉里吉里1丁目から4丁目までの4地区の対抗戦が繰り広げられた。各チームは、たくさんある対抗種目の出場者を抜擢するために、それぞれのリーダーが町内をめぐりめぐった。地区が総員で参加するような趣旨のイベントで、各町内の結びつきが強まり、地区全体への愛着を高めた。2014年に再開された運動会は、紅白に分かれての大会でフルではなかった。しかし、再び2020年からコロナで中断となった。そして、2023年再開された運動会は記念の第50回大会であった。大震災で3回、コロナで3回の中止を経ての記念の大会は、震災後に再編された「越郷会」「結和会」と高台にある「花道育成会」「若葉会」の4町内会・自治会の対抗競技も盛り込まれた。

運動会は地域の多様な住民が分業と協業によってフル活動する絶好の機会である。筆者の生まれ育った群馬県での地区運動会は地区の一大イベントで、振り返れば相当のことを地区でやり切っていたことはすごかった。しかし、それが続いたのも、1970年代初めくらいまでであったか。首都圏に近い北関東では徐々に都市化が進み、地域住民の娯楽も個人主義的になっていった。地域力の発揮して運動会を取りしきるといふ地方共同体的な風土は、都市化エリアの拡張とともに雲散霧消していったのである。

ところで、運動会の意義は別の観点からも重要である。運動会は災害用備蓄倉庫に収蔵している物品をフル活用する。町内会倉庫の在庫確認にもなる。その備品のなかには、鍋釜もあり、運動会の当日には、参加者全員に、具だくさんのとん汁とカレーライスがふるまわれる。災害時の炊き出しのようである。大運動会ということで、地区の全員に集合を呼びかけることで、いざという時に

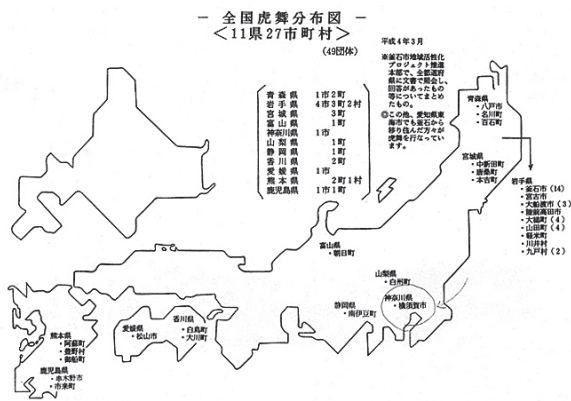


図6 全国虎舞分布図

出所：盛岡大学大石教授作成 1992年3月。

避難所となる小学校へ集まる訓練になる。そこでまた、参列した人々の健康状態や高齢化の進展度を互いに把握し、欠席者があれば、あの人はどうしたかの心配にも話しが及ぶ。各競技の出場者を配置する時には、選手の体力の現状にも関心が及ぶ。かくして、吉里吉里地区大運動会は、防災訓



写真3 2014年復活「地区大運動会」
写真は2016年。


練の様相を多分に含んだお楽しみ会なのである。

さらに重要なポイントは、いざという時に使用される体育館を活用し、また、吉里吉里学園小学部・中学部の教職員が適宜参加するのである。この点では、地元の学校にこの地区の出身者が教員としてその一部を占めていることが重要なのである。かくして運動会は、公的セクターに現に働く、地元出身の役場職員や教職員を含みつつ、地域の元公務員、消防団員、民生委員、地区会役員、護持会役員、氏子会役員などなど、多士済済が参加して、実施される一大イベントとなる。そしてそこには、外部からの交流者なども多々参入するのである。

8 住民意識調査 住民の復興感(2019年復興公営住宅入居者調査より)

8.1 あなた自身の復興度(図8)

2019年に岩手大学社会学研究室が実施した公営住宅調査(15歳以上の大槌町住民の全数調査)では、吉里吉里地区の公営住宅住民の回答は、町全体と比べて、ややポジティブな様子が見える。復興度の自己評価が「60%以上」と「80%以上」の二つを足した比率において、町全体では44.8%であるのに対して、吉里吉里地区では50%、赤浜地区では52.6%、安渡地区では49%である。住宅の復興度においては、他と比べてポジティブな傾向が多少なりとも高いといえる。復興まちづくり計画や現在の居住の状態が反映していると思われる。



第50回 元気いっぱい 吉里吉里'大運動会


日時 令和5年10月1日(日)雨天時決行
8時30分集合 9時開会

場所 吉里吉里学園小学部校庭
雨天時 吉里吉里学園小学部体育館

◎終了後には、全体懇親会があります。

記念品があんがえ。
カレーライスもみんなで食べっぺし!!

ご家族そろって“おでんせえ”



主催 吉里吉里大運動会実行委員会 ☎ 44-2221

図7 元気いっぱい吉里吉里地区大運動会
「50回大会」ちらし
写真は2016年。

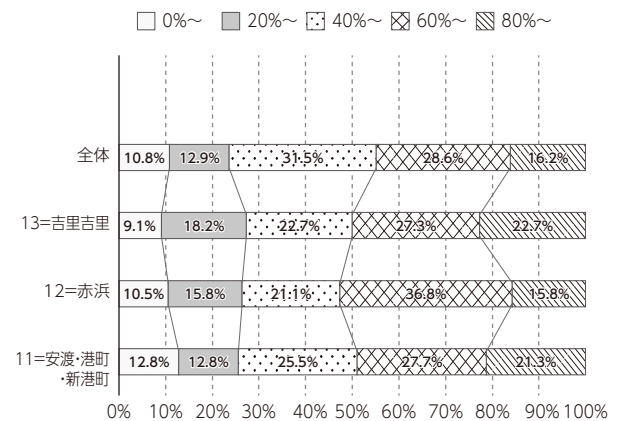


図8 あなた自身の復興度

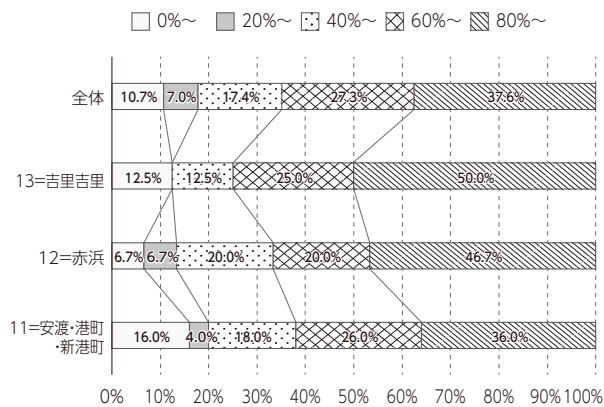


図9 住宅の復興度

8.2 住宅の復興度 (図9)

住宅の復興度においてもこの傾向がよりいっそう顕著である。「60%以上」と「80%以上」を足した比率において、町全体では64.9%であるのに対して、安渡地区は62%、赤浜地区は66.7%であり、吉里吉里地区では75%とほかと比べて大きな違いがみられる。吉里吉里地区の公営住宅住民にとって、復興の度合いは、ほかの地区と比べて高いということが確認できた。共同体的な対処のⅡのところと言及したように、公営住宅住民層が定着するための地域の中で、地域共同体的な配慮がなされた結果といえる。

9 考察

地域社会を構成する人々がそれぞれにこの地域社会で生活を営み、この地域社会を持続させるために、多様なジャンルでの活動が継続している。その結果、この地で生活することを選択し、あたりまえのように継続し、また愛着を深めていく傾向がみられる。通常の活動や不定期の活動を通じて、次の世代へと継承される傾向をうかがうことができる。

この地域社会を本拠地として生活し活動している人々や団体が、この地区の他の人々との連携を継続し、継続すること自体に価値を見だし、持続的に発展していく要素が含まれているのではないか。三つの次元でみた共同体的な対処の質が、「地域の力≡ガバナンス力」となり、地

域の自治能力を高めているといえる。かつて、吉里吉里、赤浜、浪板は、一つの自治体であった(吉里吉里村)。吉里吉里地区はその当時のガバナンス力を温存し、継承してきている。この地域の文化としての持続性を発揮しているのである。

本研究(中間的)は、この地域のリーダーから普通の人まで、また、甚大な被害を経験した人々の協力や連携なくしてできなかった。この地域の自治と連携する調査研究活動だということ継続中の取り組みも多い。吉里吉里地区で発揮されている地域の力は、いくつもの次元で発揮されているが故に、この地区に被災後も引き続き生活し続けたい、この地域の共同体的な環境の下で暮らしていきたいという磁力が形成されているのである。

その力は、災害時から復興までの諸段階をへて、次の災害の備えまでも見据えた緊急事態における地域社会のガバナンス力を高めているのである。この力は、平素からの地域共同体の活動能力であり、さらには非日常的な地域共同体の行事・イベントのもつ凝集力や魅力、そして地域アイデンティティを高める力にもなっているのである。

行政が事業主体となる復興政策は、インフラの整備のほかは、住宅再建や復興住宅への入居支援や産業基盤の育成などが主で、地域のガバナンス力を高めるための施策や地域共同体の活性化のための施策とか、地域文化振興のための施策とかはほとんどなきに等しい。大槌町吉里吉里で地域文化が根付き、地域社会の持続性への取り組みがみられるのは、地域社会の中の、個々人や、各種のもろもろの集団の活性化によるものである。

最後に、三つの軸とは別に、IVつめに、公助や外部との連携が挙げられる。地域社会内部のことではないので別枠としたが、公助の基盤や、公助との連携は必要不可欠である。これが低下したところでは、三つの軸も地盤沈下してしまう。吉里吉里地区では、こうした面でも連携を図って、公助にもモノ申していく姿勢があり、そうした点からも地域の力が充実しているといえるのである。

また、他の自治体等と活発に連携してきた。岩手県紫波町、秋田県五城目町、秋田県大仙市(平和中学、地区恒例の花火大会へと展開)などである。地区の計画や活動に従事し、寄り添って

表 10 三つの次元を支える公助や外部との連携

地域の力の三つの次元	具体的な課題	地区における課題への対処状況
IV 上の基盤を支える公助	A 小学校や地区の公民館が拠点となること。 B Aと地域との連携が図られていること。 C 地元消防団員、地元出身公務員・元公務員等が地域活動の担い手として一定の活動ができる余裕があること。 D 地区外の人々、団体・グループ、地域、自治体等との連携。	A 吉里吉里学園小学部中学部の存続。 B 教職員の一部が地元出身、地域のイベントに参画。 C 町消防団第3分団は地区の防災、各種行事で活躍。公民館吉里吉里分館運営委員等が地域活動を主導。

きた大学や学生との関係を継続してきた。東京大学（復興計画等）、明治学院大学（ボランティア、文化活動等）、岩手大学（防災、各種調査記録化）ほか多くの大学・学校等々との連携がみられる。

吉里吉里10年住民調査からは、以下のようなコメントが寄せられた。

地域のコミュニケーション、郷土芸能の伝承継続、小中一貫教育（ふるさと科）の推進とコミュニティスクールの立上げ、支援をして頂いた方々への感謝の気持ち。（50歳代男性）
全国の皆様に感謝の気持ちでおります。10年間支えられここ迄来ました。また、吉里吉里のため、このようなアンケート本当にありがたく、吉里吉里のため想う気持ち、深く感謝です。本当に御苦勞様です。吉里吉里のためありがとう御座居ます。どうぞお体を大切に御自愛下さい。（70歳代女性）

注

- 1) 2020年2月29日に除幕式が行われた。河北新報「悲惨な思い 二度としないように 大槌・吉里吉里に震災記念碑が完成」2020年3月1日付。
- 2) 「大槌町吉里吉里公民館落成式」（2018年4月23日）北光コンサル株式会社 URL（<http://hokko-c.co.jp/2852>）
- 3) 2022年、日本土木学会の「吉里吉里地区復興まちづくり」は優秀賞を獲得した（福島2023）。土木学会関係者や役場職員・他自治体からの応援職員が名を連ねる中で、住民の要望を聞き調整を図った「藤本俊明氏の名前が含まれていることがここでは、特筆すべきこと」。

参考文献

- 福島秀哉編著，2023，『コミュニティのかたちと復興区画整理 大槌町町方・吉里吉里の地域デザイン』鹿島出版会。
- 岩手大学教育学部社会学研究室，2018，「平成29年度 大槌町・盛岡市における傾聴支援・サロン活動による心の復興事業—岩手大学教育学部—実績の概要」岩手大学教育学部社会学研究室・プロジェクト責任者 麦倉哲。
- 岩手大学教育学部社会学研究室，2019，「2019年度 大槌町・盛岡市における『サロン活動』による心の復興事業—心の復興サロンと語り継ぐサロン」岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会。
- 岩手大学教育学部社会学研究室，2020，「2019年度 大槌町・盛岡市における『サロン活動』による心の復興事業—心の復興サロンと語り継ぐサロン」岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会。
- 岩手大学教育学部社会学研究室，2021，『東日本大震災伝承記録誌 ～東日本大震災遺族の心をつなぎ伝承する活動～』岩手大学教育学部社会学研究室生きた証を記録し語り継ぐ会。
- 麦倉哲ほか，2013，「日本大震災被災地域にみられた救援・助け合いの文化—岩手県大槌町避難所運営リーダーへのインタビュー調査から」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』（12）：15-28。
- 麦倉哲，2016，「生きた証プロジェクトのもつ意味や意義：大災害後の歴史的テーマは『すべての犠牲者と向き合うこと』」『現代の社会病理』（32）：5-22。
- 麦倉哲，2017，「東日本大震災遺族における『死者との相互行為』：岩手県大槌町での経験を中心に」『岩手大学文化論叢』（9）：127-149。
- 麦倉哲，2021，「大災害時の避難所対応はどうあるべきか—子連れ、女性避難者の経験から再考すること」『災害復興研究』（13）：33-50。
- 麦倉哲，2022，「生きた証から伝承まで11年間に取り組み・考えてきたこと—大震災を語り継ぐ会での取組事例から」『災害復興研究』（14）：3-20。
- 麦倉哲・野坂真，2019，「東日本大震災遺族の生の軌跡と心の復興に関する研究」『公益財団法人 明治安田こころの健康財団研究助成論文集』（54）：135-

144。

麥倉哲, 2022, 「震災の何を伝承するか、どう伝承するか
——焦点は『災害犠牲死』と『公共圏』」『教職研修』
(3): 94-95。

大槌町, 2015, 「東日本大震災津波 大槌町被災概要」

大槌町文化遺産活性化実行委員会, 2015, 『大槌町の郷土
芸能』東北文化財映像研究所